

# 弘前学院大学ティーチング・ポートフォリオ

社会福祉学部・社会福祉学科  
丸山 龍太

作成日 2024年1月31日

## 1. 教育の責務

<p>2014年度に弘前学院大学社会福祉学部に採用され、現在に至る。社会福祉士及び精神保健福祉士国家試験受験資格科目を中心に講義及び演習を担当している。1年生対象では、「社会福祉とは何か」を学ぶ導入科目である「社会福祉論A」を担当し、各科目への学びの動機づけを図っている。2年生対象では「ソーシャルワーク演習Ⅱ・ソーシャルワーク演習Ⅲ」を担当し、事例を用い、現場での実践に備える演習を行っている。3年生対象では、自身の専門分野である「公的扶助論」の講義を始めとして「ソーシャルワーク演習Ⅳ・ソーシャルワーク演習Ⅴ」で演習の更なる深化を図り、「社会福祉実習指導Ⅱ」「社会福祉実習」にて、現場実習に臨む学生の指導を行っている。その他「専門演習Ⅰ」にて卒業論文作成に向けた指導を実施している。4年生対象では「精神保健福祉演習Ⅱ」にて、事例を用いた精神保健福祉専用の演習を展開し、受講生と学びを深めている所である。</p>				
2023年度担当授業				
科目名	学年	授業種別	開講学期	概要
社会福祉論A	1～4年	講義	前期	社会福祉学、社会福祉発達史、社会福祉の倫理
ソーシャルワーク演習Ⅱ	2～4年	演習	前期	ソーシャルワーク、事例検討、ロールプレイ
ソーシャルワーク演習Ⅲ	2～4年	演習	後期	ソーシャルワーク、事例検討、ロールプレイ
ソーシャルワーク演習Ⅳ	3～4年	演習	前期	ソーシャルワーク、事例検討、ロールプレイ
ソーシャルワーク演習Ⅴ	3～4年	演習	後期	ソーシャルワーク、事例検討、ロールプレイ
公的扶助論	3～4年	講義	前期	貧困・スティグマ・生活保護
専門演習Ⅰ	3～4年	演習	通年	文献研究、貧困、生活保護
社会福祉実習指導Ⅱ	3～4年	実習	通年	社会福祉士実習、実習前指導、実習後指導
社会福祉実習	3～4年	実習	通年	社会福祉士実習

## 2. 教育の理念

小生の教育理念は、人を支援する上で害悪となる「スティグマ」を如何にして根絶せしめるか。それが、社会福祉の「権利的保障」には欠かせないことを学生に訴え、プロフェッショナルとしての礎を築くことにある。「スティグマ」は、社会福祉学でも2021年度のカリキュラム改訂によって「教育に含まれる事項」にその名が乗るようになったものである。「恥・屈辱・烙印・暴力」等と訳されるスティグマは、社会福祉をどのように運営するかという問題で古くから問題提起されてきた。姿形は一切ないこのスティグマは、機関・制度・ワーカー・市民に入り込み、数々の悪影響をもたらす。スティグマによって、支援を受けようとしめない人の存在が浮き彫りとなっている。特に小生が専門とする「公的扶助」は、濃厚なスティグマが付与されている関係で、どれ程貧困に陥っても（最後の安全網である）「生活保護だけは墓に入っても受けない」と拒否するクライアントが発生し、実際に死んでいる。社会福祉学がどれほど発達しようとも、スティグマが生き続ける限り、社会福祉は真に市民のための制度には至っていないというのが、小生の見解である。いかにしてスティグマを根絶し、スティグマのない（スティグマの少ない）社会福祉制度を作り上げるか。小生が社会福祉教育を行う上で、プロフェッショナル養成をする上での普遍的な原理となっている。

また、小生の教育理念としてもう一つ外せない大事なことは「灰色」である。社会のあり方も白か黒か二元論で捉えることは不可能である。世の中に「あたり前」ということは一切ない。人間の生活は常に「灰色」の中でもがき続けるものであると考えている。様々な理由が絡み合うことで生活不安が発生する。人を支援するのも特定の答えなどは一切ない。「灰色」の中で暗中模索しながら行うのである。よって、簡単に二元論で物事を捉えることは社会福祉のプロとして避けるべきである。学生には常に物事を「灰色（一元的ではなく多面的に）」で考えられることを繰り返し訴えている。

## 3. 教育の方法

講義形式の授業では、パワーポイントを使用した資料を配布し、板書を併用しながら授業展開している。途中、受講生に質問し、一方通行の授業展開とならないよう心掛けている。

演習形式の授業では、事例検討・ロールプレイ等を併用しながら、学生が主体的に考え行動できるよう、教員は若干のアシストをする役と位置づけている。グループワークで行き詰った場合に介入し、ヒントを提示する。受講生が答えを導き出せるように毎回の演習では注意を払っている。

実習形式の授業では、実習生が実習テーマを固める作業をアシストする役割を担っている。受け身ではなく、自ら動かなければ前に進まない状況を作り、それぞれの実習生の自主的な動きを促すこととしている。実習生は時に実習テーマを確定することに難儀することがある。その時には、実習生との対話を通じ不明な点を洗い出し、実習生が答えを自ら導き出せるよう徹している。

実習は、実習先があって成立する。実習指導者とは例年、実習生の特徴をお伝えし、訪問時に教員と実習指導者が二人三脚で実習生の学びを促進できるよう連携を強化することを重視している。

#### 4. 教育の成果

1. 小生の授業評価アンケートでは、全学平均値とほぼ同じ程度の「満足」の項目を頂いている。話し方に関しては、全学平均値を上回り、適切と評価する受講生が多い。1分間に270字～300字程度の速度で話すことを意識して授業展開していることにある。
2. 複数の受講生から聞くことができたのであるが、本学社会福祉学部の中では最も「ニコニコしながらエグイ課題を出す教員」と言われたことがある。それは「自ら考え、自ら根拠を持って解決策を提示しなければならない課題が多く出された為、一筋縄ではいかない授業であった」ことを「エグイ」と表現したものであった。プロとして活躍する上でも受け身的であってはならないと考える小生にとって、自ら学び知識等をつかみ取る授業展開ができている点は、率直に評価できる点である。今後も、自ら学び知識をつかみ取る授業展開を講義系、演習系ともに展開することとしたい。

#### 5. 教育の改善

全体としてみれば、授業評価アンケートで評価が20%以上下位に位置する項目は見当たらなかった。早急に取り組む個別項目はないと考える。一方、回ごとの授業展開速度がしばしば安定せず、残り10分程度で足早に解説しなければならないことが生じている。1授業の内、パワーポイントの資料は30～36スライド程度を目安にしているが、それ以上のスライドで資料を作成した場合、矢継ぎ早の授業展開となりがちである。厚生労働省から指定された授業内容を踏まえつつ、授業展開が平準化できるよう授業をアップデートすることとしたい。

## 6. 教育の目標

2023年度は、2021年度から開始された「新カリキュラム」3年目であり、小生の科目の多くが「新カリキュラム」に移行する年である。新カリキュラムに合わせた授業資料の作成を行いつつ、授業展開を実施する。

新カリキュラムで行った授業が、旧カリキュラムの頃より評価が下がるのか否か。授業評価アンケートを踏まえ判断することとなる。もし、旧カリキュラムの頃より評価に大きな差が生じた場合、2024年度以降時間をかけてより良い授業展開ができるよう資料の改善、授業展開の改善等を行っていくこととする。これらを行いながらプロフェッショナル養成をさらに円滑なものとしたい。

### 【資料】

1. シラバス
2. 配布資料
3. パワーポイント
4. 授業評価アンケート